

菊池洋子ピアノリサイタル

オール・モーツァルト・プログラム

1 部

ピアノソナタ 第7番 ハ長調 K.309

ピアノソナタ 第16番 ハ長調 K.545

フランスの歌「ああ、お母さん聞いて」による
12の変奏曲 ハ長調 K.265

2 部

幻想曲 ハ短調 K.475

ピアノソナタ 第14番 ハ短調 K.457

夏

2019
四季コンサート

2019年7月18日(木) 18:00開場 18:45開演

会場:アクトシティ浜松中ホール

主催:浜松音楽友の会

プロフィール

2002年第8回モーツァルト国際コンクールにおいて日本人として初めて優勝して一躍注目を集めた。その後、2003年にザルツブルク音楽祭のモーツァルト・マチネに出演するなど国内外で活発に活動を展開し、いまや実力・人気ともに日本を代表するピアニストの一人である。

前橋市生まれ。故田中希代子、故林秀光の各氏に師事。桐朋学園女子高等学校音楽科卒業後、イタリアのイモラ音楽院に留学、フランコ・スカラ、フォルテピアノをステファノ・フィウツツィに師事。

これまで、国内の主要オーケストラとの共演はもとより、国際的にもリサイタル、オーケストラとの共演、室内楽演奏会で成功を収めている。2004年ライプツィヒ弦楽四重奏団との日本ツアー、オーケストラ・アンサンブル金沢のアジア・ツアーのソリスト、アフラートゥス・クインテットとの共演及びレコーディング、2008年アンサンブル・ウィーン=ベルリンなどと共演。2010年には、チューリッヒ・トーンハレでのリサイタルが絶賛を博し、ホルンの名手ラデク・バボラークとレコーディングも行った。2011年以降、シュレスヴィヒ=ホルシュタイン音楽祭にたびたび招かれているほか、2015年プラハの春音楽祭でアフラートゥス・クインテットと出演した模様は、チェコ国営テレビで放送され、好評を博した。2009、2018年にモーツァルトのピアノソナタ全曲をフォルテピアノとモダンピアノを用いて演奏するといった意欲的な企画に取り組み好評を得た。2018~19年、兵庫県立芸術文化センターにおいて「モーツァルト 音のパレット」と題したシリーズを開催中。バレエとのコラボレーション公演にも出演し、世界的バレエダンサー ディアナ・ヴィシニョーワや吉田都ほかと共演している。CD録音も活発に行い、エイベックスとオクタヴィアよりリリース。2005年に発売したデビュー盤「モーツァルト・アルバム」(エイベックス)では、第18回ミュージック・ペンクラブ音楽賞クラシック部門録音・録画作品(日本人アーティスト)賞を受賞した。

第1回上毛芸術文化賞(音楽部門)、第17回出光音楽賞を受賞。

菊池洋子オフィシャルホームページ: <http://www.yokokikuchipf.com/>

菊池洋子
ピアノリサイタル



YOKO KIKUCHI
PIANO RECITAL

●ピアノソナタ 第7番 ハ長調 K.309

モーツァルトがミュンヘン、アウクスブルク、マンハイム、パリへと約1年にわたる旅をした1777年に作曲された。マンハイムで活動していた宮廷楽団の指揮者クリスティアン・カンナビヒの家に出入りして交流を深める中、彼の娘ローザのために作曲したとされている。全体は、アレグロ・コン・スピリート、アンダンテ・ウン・ポー・コ・アダージョ、ロンド：アレグレット・グラツィオーゾの3楽章からなる。アレグロの第2主題への移行部で現れるスタッカートの上行音型は、滞在先であるマンハイムの打ち上げ花火をイメージしている。アンダンテ・ウン・ポー・コ・アダージョの曲調は、モーツァルト自身も言及しているように、ローザの性格をそのまま表現したもの。最後のロンドは、15歳のローザの演奏能力が最大限発揮されるように、華麗でありながら決して過剰ではない技術を盛り込んで優美な音楽に仕立てられている。

●ピアノソナタ 第16番 ハ長調 K.545

モーツァルト音楽の特徴ともいえる愛らしさと優雅さの同居した曲のひとつとして愛されてきたソナタであり、多くのピアノ学習者によって演奏されてきた作品。モーツァルトは1788年にこの作品を作曲すると、作品目録にこの作品名を「初心者のための小さなクラヴィア・ソナタ」という副題とともに記録している。しかしながら、簡単な曲として書いたわけでは決してなく、モーツァルトは芸術のエッセンスを初心者も経験することができるようにと自らの音楽を純化することに専念したのだと思われる。第1楽章のアレグロでは、水が流れるような音階が登場するのが特徴的。第2楽章のアンダンテでは、冒頭のフレーズを柔らかに変化させていく音楽が展開する。最後のアレグレットは小ロンドとなっており、小規模ながらもぎゅっと凝縮された陽気さで作品を締めくくる。

●フランスの歌〈ああ、お母さん聞いて〉による12の変奏曲 ハ長調 K.265

子どもの歌〈きらきら星〉のメロディとしてよく知られるこの作品の主題は、もとをたどると1770年頃からフランスで流行したシャンソンからとられており、〈ああ、お母さん聞いて〉というタイトルの通り、娘が母に自分の恋のことを打ち明けようとする歌であった。変奏曲は1781年から82年に作曲されたという説が有力。極めて単純で愛らしい主題を、モーツァルトは、音階、分散和音、装飾音など工夫をこらし、12の様々な音楽に変化させている。第1および第2変奏では、主題が16分音符に分割されて装飾され、第3および第4変奏では右手と左手が3連符で駆けめぐる。第5変奏で対位法的手法が現れ、両手の対話をみせたかと思うと、第6および第7変奏で再び16分音符が登場。第8変奏で同主調のハ短調に転調をみせたのち、第9変奏で再びハ長調に戻って模倣のように両手間を主題が行き来する。さらびやかな第10変奏を経て、第11変奏では慣例通りのアダージョ、最後の第12変奏のアレグロでも主題が回帰することはなく、最後まで息つく暇もなく存分に両声部による主題の変奏が行われる。

●幻想曲 ハ短調 K.475

1785年作曲のこの作品は、その前年に作曲された〈ピアノソナタ第14番〉とともに「フォルテピアノのためのファンタジーとソナタ 作品11」というタイトルで出版されており、ソナタ第14番の「前奏曲」のような位置付けと捉えられている。このように「前奏曲」にあたる作品のほうが後に書かれる例は他にもあったようだ。全体は、アダージョ、アレグロ、アンダンティーノ、ピウ・アレグロ、テンポ・プリモの5部分からなる。最初のアダージョはハ短調のような音楽で始まるが、実のところ調号はつけられていない。冒頭のモチーフが次々と調性を変化させながら現れることで独特の不安感を醸し出す。アレグロでは、トレモロとオクターヴのバスが激しく鳴り響き、減7の分散和音が不穏な雰囲気をつくっている。アンダンティーノで変ロ長調が明瞭な調性をもって奏でられると、続くピウ・アレグロでは分散和音を繰り返しながら再び度重なる転調を経て、やがてハ短調の属7和音に到達。最後のテンポ・プリモでは、3オクターヴにもおよぶ象徴的なハ短調の音階で幕を閉じる。

●ピアノソナタ 第14番 ハ短調 K.457

先に演奏されたK.475の幻想曲を「前奏曲」にもち、両作品はしばしば連続して演奏される。第1楽章アレグロ（版刻譜：モルト・アレグロ）は、半音を含み緊張感を伴ったハ短調のソナタ形式。途中、変ホ長調へ転調しながら、最後は第1主題にもとづくコーダで締めくくられる。第2楽章アダージョは、ソット・ヴォーチェの指示で始まる穏やかな主題が特徴的。その後、豊かな装飾と細かな音型で展開していき、主要主題が変奏されながら再三現れる。作品全体が不安げな音楽である中、第2楽章は安らぎを感じさせる。第3楽章モルト・アレグロ（版刻譜：アレグロ・アッサイ）は、変則的なロンド・ソナタ形式。全体を2部に分けることができるが、いずれにおいても第1主題と第2主題をどこにも落ちつけることなく、短いエピソードを連綿と紡いでいくような音楽に仕上がっている。

アンコール曲（モーツァルト）グラスハーモニカのためのアダージョ ハ長調 K.356、（モーツァルト）ジークト長調 K.574、（モーツァルト）ピアノソナタ第11番イ長調 K.331 第3楽章「トルコ行進曲」